

被服構成学実習における並み縫い縫い目の品質評価

神戸女大瀬戸短大 十一玲子

【目的】人は一生衣服と無縁になることはない。衣服は和服から洋服に移り、そのほとんど100%近くを既製服が占め、手縫いの機会が減少している。しかし、現在手指を動かすことは脳の発達を促し、手作りの楽しさが人格形成に重要な役割を果たすと注目されている。そこで我々は、布の縫合技能の基本として並み縫いに着目し、その品質即ち外観（大小不揃い、逸脱）と強度（流れ目、縫い糸）について検討してきたので、これらをまとめ被服構成学実習の指導に役立てる。

【方法】試料布は綿100%の浴衣地、手縫い糸は綿100%の糸5種、ポリエステル100%の糸2種の計7種とし、縫い針はガス針10号を使用した。クラブ法に基づいて引っ張り試験を行ないその結果を観察判定した。

【結果】浴衣地縫製の際、並み縫いの条件としては、外観は①縫い目の長さは、バラツキがあると美しくないが、品質・性能上問題がない。②縫い目は基準線にそっていることが望ましい。縫い代側に逸脱した場合、原点は保護され破断は生じない。その反対側に逸脱した縫い目は原点に力が集中し、破断が伸張する。強度は①流れ目の傾斜角が30度以下になると、破断孔を生じ流れ目の位置で破損するので、90度に近い角度で縫うことが望ましい。②縫い糸は綿28番2子糸及び30番3子糸がよい。以上をふまえ、並み縫い指導をしているが、反復練習に主力を注いでいた指導から科学的な指導ができるようになり学生の関心度も高く、練習の成果があがってきた。さらに指先の巧緻性を養うことにも役立ち、人間教育にも有益である。